「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」詩文の著者沈浪仙（沈筠）について

石　暁軍

一、はじめに

二〇一三年三月に公表した拙稿「河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊に関する新史料」[一]のなかで、前年秋に筆者が姫路市林田敬業館で発見した「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」内容の解読や史料価値などの検証を通じて、当屏風の詩文の著者が清末中国浙江省の文人沈浪仙（沈筠）（一八〇二～一八六二）であることを明らかにした。それでは、沈浪仙（沈筠）は何故この屏風の詩文を執筆したのか、彼はどのような人物なのか？研究の第二弾として、更にこのような問題について追及する必要があると思う。

前稿で簡単に指摘しているように、沈浪仙（沈筠）は清朝末期の浙江省平湖県の乍浦という地方で活躍していた文人であるが、彼の編纂による『乍浦集詠』十六巻四冊という乍浦の郷土文人達の詩集がアヘン戦争（一八四二年）の時に乍浦での戦禍やイギリス軍の暴行などを語るものとして、中国で刊行された僅か半年後の道光二十六年（一八四六）十二月に異例の速さで日本に輸入された。しかも間もなくいくつかの抄本や和刻本も現れて、広く幕末の識者や役人に読まれていたというわけで、沈浪仙（沈筠）の名前は幕末の日本の知識層によく知られていたようである[二]。

ところが、沈浪仙（沈筠）の殆どの著述がその後の太平天国の戦乱（一八六一年の乍浦侵攻）で失われた[三]ため、彼の名前も世に埋もれて人々に忘れてしまい、長い間に中国でも日本でもあまり知られていなかった。二十世紀六十年代に入ってから、関西大学教授の大庭脩博士が、江戸時代における唐船持渡書すなわち漢籍の輸入という問題を研究された際に、初めて江戸時代における中国書輸入の特例として沈浪仙（沈筠）『乍浦集詠』を取り上げられたが、

沈氏自身について詳しく論じられていない[四]。近年になると、明治大学教授の徳田武博士が高松藩の漢詩人山田梅村と沈浪仙（沈筠）との交流についての研究[五]、九州国際大学付属高校の亀田一邦氏が沈浪仙の日本漢詩収集および長崎文人との交流に関する研究[六]により、沈浪仙の人物像は少しずつ明らかになってきた。しかし、沈浪仙（沈筠）の全体像については、不明な点や再検討すべきところがなお多く残されている。

そこで、河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊関係を反映する「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」の研究の一環として、本稿では、諸先行研究を踏まえて沈浪仙（沈筠）の生涯と著述活動とりわけ彼の日本研究について検討してみたい。

二、沈浪仙（沈筠）の生涯

清末一地方の郷土文人として、沈浪仙（沈筠）に関する記事は主に光緒以降の浙江省平湖県の地方志に散見している。そのうち、光緒十二年（一八八六）に刊行された『平湖県志』（清彭潤章修、葉廉鍔纂。以下『光緒平湖志』と略称）[七]に収録されている彼の略伝は比較的詳細に記載されている。『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三の「文苑」に、

沈筠、字實甫、號浪仙。食貧勵節、少嗜學、以母教。遂研索古籍、自六經三傳、莊屈馬班而下、莫不漁獵菁英、以發抒其文藻。晩歳敦重名教、凡忠義節烈之事及耆舊詩文殫心採集、今賴以存者皆筠表揚之力也。著有『乳水流芳錄』一卷、『瑤池冰雪編』一卷、『壬寅乍浦殉難錄』一卷、『龍湫嗣音集』十二卷、『守經堂詩集』十六卷俱刊行於世。『蜻蛉州外史』十二卷、『日本紀略』一卷、『海上文徵』八卷、『滄海珠編』二十四卷、『守經堂困學錄』八卷未梓。（句読点や傍線等は引用者による。以下同。―石）

とある[八]。この略伝によれば、沈浪仙の本名は沈筠、字は実甫、号は浪仙である。伝記には、貧しい家庭で生まれ育っていたが、みずから励まして幼い時より勉学に夢中し、母親の指導の下で儒家の経典のみならず、荘子、屈原、司馬遷、班固などのいわゆる経史子集という各分野学問の精髄を研鑽し、学問に励んでいた。晩年になると、「名教」即ち儒教の道徳や教化を重んじて、忠義の士や節を守って殉ずる人物の事績を明らかにして宣伝し、一所懸命に詩文の

蒐集にも力を入れていたと記載されているほか、沈浪仙の著作については既刊と未刊はそれぞれ五種あったという。

なお、『光緒平湖志』巻二十三「経籍」には、沈浪仙の代表作に関する書誌学的な記載があるだけでなく、彼の両親の著作についての記事も見られる[九]。

『先得月樓遺詩』、朱蘭。木雞老人序、刊本。沈晋儒室、筠母。『乍浦通志』作『繡餘漫詠』。

右の史料から、沈浪仙の父親は沈晋儒といい、母親は朱蘭という名前のほか、母親の朱蘭氏は当時の女性の中で非常に珍しく、一般の読み書きのみならず、自らも文筆活動を行い、『先得月樓遺詩』（別名は『繡餘漫詠』）という詩集までを刊行した女流詩人でもあったことが分かる。前述した沈浪仙が幼年時代に母親の指導を受けて学問に専念していたことは、この記事を通じて理解できる。

また、父親の沈晋儒は、沈浪仙の生まれた直後に亡くなったようである。沈浪仙の『守経堂詩集』の冒頭には、道光二十四年（一八四四）に知府の補助官にあたる乍浦海防同知である龍光甸（一七九二～一八四九）の序文が収録されている。その序文には、

寶甫生六月而孤、十四歲復失恃、賴大母撫育成人。食貧居賤、筆耕以自給、卒能發憤讀書、爭雄一代、所著守經堂詩幾百萬言。

とある[一〇]。ここの「寶甫」とは沈浪仙の字である。即ち沈浪仙は半歳の時に父親を失って、十四歳の時に母親も亡くなったため、「大母」＝祖母の育ちで成人となったのである。経済的余裕のない生活の中で、沈浪仙が文筆や代書などで身を立てながら、奮起して勉学に励み、抜群に優秀であった。また、数百万字からなる守経堂の詩を著した、と言っている。なお、同書に収録されている当時の著名な詩人であり書人でもある楊峴（一八一九～一八九六）の序文には、沈浪仙の外見と性格についての描写もあり、

浪仙骨立瘦削、與人言吶吶然不能出於口、而獨工詩、日必數篇。

とある[一一]。すなわち沈浪仙は、顔や体が痩せこけて、人との付き合いは朴訥で口下手であるが、詩には長けており、毎日に必ず数篇の詩を作ったのである。

以上の記事によって、沈浪仙の出自、育ちぶりや業績などの人物像がだいたい分かるが、上記の史料の中には、沈浪仙の生卒年についての記載が見られない。そこで、ほかの関係史料を探さなければならない。

まず彼の生年を見ておこう。沈浪仙の『守経堂詩集』巻六には、「戊戌歳除雑詩」という五言詩が収録されているが、その五十六句からなる長詩の内に、次のような詩句があり、

蹉跎復蹉跎、明年三十八。

とある[二]。詩題の「戊戌」とは清朝の道光十八年（一八三八）にあたり、「戊戌歳除雑詩」は即ち道光十八年の元旦に作った詩である。従って、詩文の「明年三十八」の「明年」は道光十九年（一八三九）である。当時の人は年齢を言う時には、数え年で計算するという慣習を考えてみると、沈浪仙の生年は嘉慶七年（一八〇二）になると推定できると思う。

次は、沈浪仙の卒年を見てみよう。彼の死去については、沈浪仙の息子である沈煒が次のように書いている[三]。

歳辛酉乍浦遭赭寇之禍、避地漾村、以未刻稿寄張君夢龍、懼不存也。後相値於沔溪、因持還。是年冬、寇至南匯、掠沔溪、而全稿淪為燹劫。是以抱憾而歿、痛哉。

沈煒がここで言っている「歳辛酉乍浦遭赭寇之禍」とは、「辛酉」即ち咸豊十一年（一八六一）太平天国軍の乍浦侵攻を指し、「赭寇」は清朝政府および当時の文人の間に太平天国に対する蔑称であった。咸豊十一年（一八六一）三月に太平天国の陳炳文の部が乍浦を攻撃し陥落させたため、沈浪仙が既刊と未刊の原稿や蔵書を持って他郷をさすらい、転々として最後に上海近郊の南匯県の「沔溪」つまり南匯県横沔鎮に避難していたのである。ところが、この年の冬に太平天国軍が更に南匯県横沔鎮を進攻し、沈浪仙の全ての著書や原稿が戦火の中で失われてしまった。そのショックを受けた沈浪仙が「抱憾而歿」即ちたいへん悲しくて亡くなったのである。

沈煒の追憶は沈浪仙の死亡および死去の背景について書かれているが、具体的な死亡時期がいったい何時であったかについては、明確に言及していない。ところが、幸い日本側の文献には、沈浪仙の死亡時期を語る記事が見られる。徳田武氏の研究によれば、幕末高松藩の漢詩人である山田梅村（一八一六～一八八一）が沈浪仙との間に密接な交遊関係があったようで、山田梅村の漢詩集『吾愛吾廬詩』第一稿（巻一、巻二）は、沈浪仙のところに送られて添削批評してもらいたいと依頼されたのである[四]。沈浪仙が梅村の全ての詩に詳細の評を加えたのみならず、また『吾愛吾廬詩』第一稿に詩を寄せて題詞をも行った[五]。その後、山田梅村の『吾愛吾廬詩』第二稿（巻三、巻四）と第三稿（巻五、巻六）も第一稿と同じように中国文人の評や題詞を依頼した。その『吾愛吾廬詩』第二稿（巻三、巻四）の

題詞の内に、沈浪仙の同郷である王峻明（字は克三）の題詞も含まれている。王克三が題詞の最後に下記のような追記があり、

友人沈浪仙因避亂至申江、去年秋間病故。一生著作盡付兵燹、深為嘆惜。特此附聞。
癸亥七月

とある[一六]。この題詞の落款の「癸亥七月」が即ち一八六三年（清の同治二年、日本の文久三年）七月であるため、題詞の正文に言及している「去年」が「癸亥」（一八六三年）の前の年、即ち一八六二年を指していることは明らかである。従って、上記の記事によれば、沈浪仙が避難するため「申江」＝上海に行ってから、一八六二年の秋に「申江」（上海）で病死したのである。さらに前述した沈煒の追憶と合わせて考えれば、沈浪仙の死去の時期は一八六二年の秋であり、場所は避難先の上海近郊の南匯県横沔鎮（今の上海市浦東新区の横沔鎮）であったと言えよう。

三、沈浪仙（沈筠）の著述および分類

沈浪仙はどれぐらいの著作があったのか？亀田一邦氏が『光緒平湖志』と『民国平湖県続志』の記載に基づいて総計百卷を超えると推定されている[一七]。具体的に言うと、上述した沈浪仙の略伝（『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三の「文苑」）には、

著有『乳水流芳錄』一卷、『瑤池冰雪編』一卷、『壬寅乍浦殉難錄』一卷、『龍湫嗣音集』十二卷、『守經堂詩集』十六卷俱刊行於世。『蜻蛉州外史』十二卷、『日本紀略』一卷、『海上文徵』八卷、『滄海珠編』二十四卷、『守經堂困學錄』八卷未梓。

と十種八十四卷（既刊は五種三十一卷、未刊は五種五十三卷）が列挙されているほか、『光緒平湖志』巻二十三「経籍」には、また次の六種があり、

『闕幽錄』四卷－續集一卷（刊）、『蕭兀瑣言』、『千金裔傳奇』（刊）、『賢博集』、『續九峰文鈔』（未刊）、『乍浦集詠』十六卷（刊）

さらに一九二六年刊行された『民国平湖県続志』巻十一「経籍」には、

『乍浦人物備採』（刊）、『増廣千字文』（刊）

二種が載せられている。上述した『光緒平湖志』と『民国平湖県続志』の「経籍」に見られる巻数の不明な書を仮に一巻と数えてみれば、『光緒平湖志』と『民国平湖県続志』の「列伝」と「経籍」に記載されている沈浪仙の著述は、既刊と未刊の合計で十八種百十一巻にのぼる。

ところが、実は沈浪仙の著述はこれだけに留まらなかった。前述した一八六一年の太平天国軍による乍浦陥落と横沔陥落の後に、沈浪仙は自著を点検し著作リスト『守経堂自著書目』を作成し、その冒頭には次のように述べている[一八]。

筠學不加脩、妄擬論撰、每歲數種、積久益繁。友人蔣楚亭贈楹貼句云、著書四十餘種、編詩千二百家。譽雖虛譽、事原實事也。辛壬之際、兵燹疊遭、煎乾心血、天之扼我、痛何可言。檢點燼餘、尚思補綴、自忘其老、任笑為駒。

ここで沈浪仙は自分の著作について「每歲數種、積久益繁」（毎年に数種を出したため、歳月が経つと益々多くなっている）と言い、その数量については、友人蔣楚亭の言葉を借りて「著書四十餘種、編詩千二百家」（著書は四十数種、詩の編集は千二百家があった）と述べたうえ、「譽雖虛譽、事原實事也」（誉める言葉であるが、事実である）と明言しているのである。また、この自著リスト作成の原因については、「辛壬之際、兵燹疊遭」即ち辛酉（一八六一）と壬癸（一八六二）の際の戦乱に遭ってから、「檢點燼餘」つまり燃え残りを点検し作ったわけである。その次には、沈浪仙は自著を四つの部分に分けて列挙している。それは下記の通りである[一九]。（引用文中の括弧内の文字は割注である。—石）

辛酉三月遭毀者二十四種

『海上文徵』八卷、『海上叢潭』八卷、『建文君臣易名錄』一卷、『唾痕』二卷、『雪泥集』四卷、『心言』（共五集十二卷、錄同人贈和之作）、『守經堂困學錄』八卷、『集腋』二卷、『海粟編』四卷、『岡浦採珍』（八本不分卷）、『戛玉集』（二本不分卷）、『紙情集』（皆人事酬應之作、四本不分卷）、『戎幕捉刀』（代官場四六尺牘一本）、『失巢禽語』二卷（紀庚戌售老屋事）、『織煙林屋詩餘』一本、『作嫁偶存』（代慶挽聯額一本）、『說夢』二卷、『賢博集』（十卷皆庚詞）、『千金壽詞源』一卷、『書緣』一卷（四十年中借讀之書、概存其目）、『蠅附錄』一卷、

『藥言』二卷、『游戲三昧』一卷、『觴政』一卷（以上三種、原本與續補者各異）

刻本化劫灰者十四種

『乍浦集詠』十六卷、計版百、『壬寅乍浦殉難錄』一卷、計版、『乍浦人物備採』一卷、計版、『千金蔚』二卷、『先得月樓遺詩』一卷、計版、『春林詩選』一卷、『計版、『謝瘦先庚寅草』一卷、計版、『鐵厓詩選』一卷、計版、『龍湫嗣音集』十二卷、計版（寄在大廟綠杉池館中被火）、『蔣楚亭求純集』四卷、計版、『瀟湘館詞』二卷、計版、『翠羽山樵雜著』二卷、計版（以上三種刻本寄在神聖宮西樓被火）、『陳愚泉鏡池樓吟藁』六卷、計版（寄在範雲岳澄清堂被毀）、『守經堂詩集』（自丙申起至癸卯止、定為十六卷。友人各助刊一卷、去冬始竣事。版未詳檢、先刊成八卷。時徐古春借去刷印贈嗜痂者、版故在五龍港者久矣。辛酉八月寇警、古春從洙沼旋復避居周浦、載版來橫沔見遷。因草屋窄小、不能容物、寄在張舒庭家。冬春壘劫、成瓦礫場、其版可知。有情者當為我一哭）

行筴所存者十七種

『滄海珠編』二十四卷（已寫宋體）、又『滄海珠編　續編』八卷、『蜻蜓州外史』十二卷、『日本紀略』一卷、『東國詩錄』四卷、『守經堂詩全藁』（道光乙酉起至咸豐辛酉止計九十本）、『守經堂雜著文』二卷、『溪堂清囈』二卷（已寫樣本）、『續千字文』二卷、『溪堂雜札』二本未分卷、『鴟蜂春秋』一本、『奚囊囊屑』八卷、『童蒙香草』一卷、九峰詩餘』二卷、『苦海見聞』、『傷心快事』（以上三種合成卷、上元友人蔣楚亭題為續言鯖）、『蕭兀瑣言』（已寫樣本）

刻本存者二種

『乳水流芳錄』一卷、計版、『瑤池冰雪編』一卷

以上の内に、「辛酉三月遭毀者二十四種」とは即ち二十四種の著書が辛酉（一八六一年）三月の乍浦陥落で失われたものであり、「刻本化劫灰者十四種」とは、十四種の刻本（整版）が焼失されたのである。この二つの部分で三十八種の著書が戦乱の中で失われてしまった。また、この著書リスト作成の当時には、「行筴所存者十七種」と「刻本存者二種」即ち沈氏の手元に残るのが十七種の著書と二種の刻本だけで、合計十九種であった。

要するに、この自著リストによれば、沈浪仙には五十七種の著作があり、巻数から言えば、「不分巻」の著作（例

えば右の引用史料に見られる『岡浦採珍』八本不分卷、『戛玉集』二本不分卷、『紙情集』四本不分卷、『守經堂詩全藁』道光乙酉起至咸豐辛酉止計九十本、など）を仮に全て一卷と数えでも、総計で二百二十四卷にのぼった。しかし実際には、『光緒平湖志』卷二十三「経籍」の「集部・別集類」には、『守經堂詩集』について次のように書かれている[二〇]。

『守經堂詩集』、沈筠。乍川沈氏藏。初、二集各十六卷、初集已刻。（中略）聞手自編定而未經授梓者尚有八十卷。

すなわち、『守經堂詩集』という著作の構成は、初集十六卷、二集十六卷および未刊行の八十卷からなり、言い換えれば『守經堂詩集』だけでは百十二卷にものぼった。このようなことを合わせて考えてみると、沈浪仙の五十七部著作の総卷数は三百卷を超えることになるのであろう。

沈浪仙の著作は膨大な数量のみならず、関わる分野もきわめて多岐であり、亀田一邦氏がそれを三つに分類されている。すなわち第一は、『壬寅乍浦殉難錄』、『乳水流芳錄』、『瑤池冰雪編』、『闡幽錄』のような、乍浦陥落の折り、無辜の住民を襲った悲劇を記す一連の著作群であり、第二は、『龍湫嗣音集』、『乍浦集詠』という、地方詩壇を舞台とした総集の編纂であり、第三は、『蜻蜓洲外史』、『日本紀略』、『海上文徵』、『滄海珠編』などの、複数の日本研究書である[二一]。

亀田氏の分類に対して筆者は基本的に賛成するが、亀田氏の分類は沈浪仙『守經堂詩集』の史料を利用されておらず、単に清末の平湖地方志に基づいた分類であるため、上述した沈氏の著書リスト『守経堂自著書目』から見れば、少なくとも更に次の二つのカテゴリーを追加する必要があると思う。

一つ目は沈浪仙の個人詩文集である。すなわち『守經堂詩集』、『守經堂困學錄』、『守經堂雜著文』のような、沈氏の一連の個人文集である。この部分は沈氏の著作の中で分量が最も多いだけでなく、彼の代表作とも言える。とくに現存する非常に少ない沈氏の著書には、この『守經堂詩集』も含まれている[二二]。

二つ目は雑纂や実用書関係である。雑纂と言えばかなり多岐であり、たとえば『建文君臣易名錄』、『唾痕』、『雪泥集』、『心言』、『集腋』、『海粟編』、『岡浦採珍』、『戛玉集』、『紙情集』、『失巢禽語』、『織煙林屋詩餘』、『說夢』、『賢博集』、『蠅附錄』、『藥言』、『游戲三昧』、『觴政』、『書緣』などがある。また実用書としては、公文書や尺牘の書き方の

入門書『戎幕捉刀』、冠婚葬祭に関係する文例集『作嫁偶存』や『千金壽詞源』などがある。

上述した二つのカテゴリーを亀田氏の分類に追加し、計五分野から観察することで沈浪仙の著述活動の全貌を把握することができると思う。

四、沈浪仙（沈筠）の日本に関する著述

前章では、沈浪仙の生涯や著述に対する考察を通じて、沈浪仙が清末の道光（一八二一～一八五〇）・咸豊（一八五一～一八六一）年間に活躍していた中国浙江省平湖県乍浦の一地方文人として、数量と関わる分野ともに人に驚かせるほどの沢山の著作を撰したことが明らかになってきた。沈氏の多岐にわたる分野と著作の内から、「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」と合わせて、本節では、沈浪仙の日本に関する著述を見てみたい。

沈浪仙の日本に関する著述については、諸史料の記事をまとめてみると、少なくとも下記のものがある。（括弧の文字は出典である。一石）

① 『蜻蛉州外史』十二巻（『守経堂自著書目』、『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三「文苑・沈筠」）。または『蜻蜓洲外史』十六巻（『光緒平湖志』巻二十三「経籍」の「史部・地志類」）。

② 『日本紀略』一巻（『守経堂自著書目』、『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三「文苑・沈筠」）。

③ 『海上文徴』八巻（『守経堂自著書目』、『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三「文苑・沈筠」）。

④ 『海上叢潭』八巻（『守経堂自著書目』）。または『海上叢談』（山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿巻四第四葉「沈浪仙輯詩圖賦應其囑」）。

⑤ 『滄海珠編』二十四巻（『守経堂自著書目』、『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」三「文苑・沈筠」）。または『滄海珠編』二十巻（『光緒平湖志』巻二十三「経籍」の「集部・総集類」）。

⑥ 『滄海珠編續編』八巻（『守経堂自著書目』）。

⑦ 『東國詩錄』四巻（『守経堂自著書目』）。

⑧ 『大東詩錄』（山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿巻三第十二葉「酬沈浪仙見寄」、第二稿巻四第四葉「沈浪仙輯詩圖

賦應其囑」）。

右の①の『蜻蛉州外史』（『蜻蜓洲外史』）と②の『日本紀略』は、書名だけから見ると日本の歴史および地理と風土などの概略に関する著作であることが分かる。②の『日本紀略』は言うまでもなく、①の『蜻蛉州外史』（『蜻蜓洲外史』）については、周知のように、「蜻蛉州」や「蜻蜓洲」は即ち「あきつしま」の当て字であり、昔から大和国や日本国の異称として知られる。従って①の『蜻蛉州外史』（『蜻蜓洲外史』）も明らかに日本の歴史に関する著述である。また、後述するように、③『海上文徵』以下の著作には、出典の違いによって巻数の相違や同書異名の可能性が存在しており、例えば④の『海上叢潭』と『海上叢談』、⑦の『東國詩錄』と⑧の『大東詩錄』は同じ本を指していると思われるが、③から⑧までの著作はいずれも沈浪仙が編纂した日本漢詩集であると考えられる。

ところが、上述した沈氏の日本に関する著述は、いずれも戦乱の中で失われて現在に残していないため、その具体的な内容は分からない。そこで以下では、沈氏の日本歴史地理に関する紹介研究と日本漢詩の編纂という二つの方面から、それぞれ具体的な例を通じてそれを探ってみたい。

(一) 日本の歴史・地理・風土に関する紹介と研究

これについて①の『蜻蛉州外史』（『蜻蜓洲外史』）を取り上げて検討しておこう。上述したように、この著作について題名に「蜻蛉州」と「蜻蜓洲」、巻数については「十二巻」と「十六巻」という記事の相違があるが、同じ著述であると考えられる。著作の内容については、『光緒平湖志』巻二十三「経籍」の「史部・地志類」には次のような記事があり、

『蜻蜓洲外史』十六巻、沈筠。黄金臺序、未刊。據日本音博士源朝苗所輯國史而删潤之。起周惠王十七年、至明神宗十六年止。咸豐辛酉乍城陷、稿失其半。

とある[三]。この記事のうち、『蜻蜓洲外史』の内容に関する記事として「據日本音博士源朝苗所輯國史而删潤之。起周惠王十七年、至明神宗十六年止」という部分であり、即ち『蜻蜓洲外史』は「日本音博士源朝苗」が著した「国史」を参照し、それに添削し手を加えて（「删潤之」）編集したものである。その叙述範囲は周惠王の十七年から明神宗の十六年までの時期であったのである。この記事は、実に『蜻蜓洲外史』の内容を解明する重要な手掛かりを提供して

くれている。というのは、もし沈浪仙が参照した「日本音博士源朝苗」の国史についてどのような書物であったかと具体的に判明することができれば、『蜻蜓洲外史』の大体の内容も分かるからである。

この「日本音博士源朝苗」の「国史」が一体どの書物であったのかについては、亀田一邦氏が「日本音博士源朝苗」という著者名に対する疑問を持ちながら、その「国史」という書物は頼山陽（一七八一～一八三二）の『日本政記』ではなかったかと推測されている。亀田氏の根拠は次の三点ある。第一に『日本政記』と『蜻蜓洲外史』の巻数が十六巻と全く同じであること、第二に『日本政記』の出版時期と沈浪仙の日本研究の極盛期が重複すること、第三に両書の叙述範囲の下限は十年の違いがあるが、ほぼ一致すること[二四]。亀田氏のこの意見に対して筆者は賛成し難い。なぜなら、亀田氏に取り上げられた三点の根拠の内、少なくとも第一点と第三点には無理があり、説得力が弱いのではないかと考える。第三点については明らかに年代が違っているし、また第一点についても『光緒平湖志』の巻二十三「経籍」の「史部・地志類」には確かに「十六巻」となっているが、沈浪仙自身が編集した自著リストである『守経堂自著書目』、および『光緒平湖志』巻十七「人物・列伝」の沈浪仙の略伝には何れも「十二巻」となっているため、『日本政記』と『蜻蜓洲外史』の巻数が十六巻と全く同じであることは言えないのであろう。それだけではなく、上述したことよりも最も重要な原因は、実は亀田氏にも問題視されている「日本音博士源朝苗」という著者名と頼山陽との間に結びつけないという点である。従って、亀田氏の推測は成立し難いと思う。

それでは、この「日本音博士源朝苗」の「国史」が一体どんな書物であったのか？筆者から見れば、それは沈浪仙とほぼ同じ時期に活躍していた江戸時代後期の漢学者、歴史家でもある巌垣松苗（一七七四～一八四九）の『国史略』ではなかったかと考える。その理由は次の通りである。

第一に、『光緒平湖志』巻二十三「経籍」「史部・地志類」に記載されている沈浪仙の参照になった日本史書「国史」の書名と著者名は、巌垣松苗『国史略』のそれとはほぼ同じになっている。この点については両者を比較すると一目瞭然である。

『光緒平湖志』には、書名は「国史」であり、著者名としては「日本音博士源朝苗」とあるが、巌垣松苗『国史略』の書扉には、「国史略　音博士巌垣先生編次　皇都五車楼梓」とあり、各巻たとえば巻一の巻頭には「国史略巻之一　従五位下行大舎人助兼音博士源朝臣松苗編次」となっている[二五]。

上記した『国史略』の著者名は言うまでもなく巖垣松苗のことであるが、「松苗」という名前の前に長い肩書を連ねている。その長い肩書を区切ってみると、「従五位下、大舎人助、音博士、源朝臣」という四つの部分に分けられる[二六]。巖垣松苗が江戸後期に活躍していた漢学者として、多くの歴史人名辞書には彼に関する項目があるが、手元にある『日本歴史大事典』の巖垣松苗の条を開くと、

巖垣松苗　いはがき・まつなへ　一七七四～一八四九

江戸後期の儒者。初名維光、号東園または謙亭。京都の人で龍渓の養子。父のあとをついで従五位上大舎人助、音博士となり、また遵古堂に門弟を教授。国史にも通じ『国史略』五巻の著がある。

とある[二七]。これによれば、巖垣松苗は父親の巖垣龍渓のあとを継いで上述した官位を歴任していたことが分かる。そのため、巖垣松苗は上記した『国史略』以外、元の曾憲之編『十八史略』に関する標註などの自分の著書にも上述の肩書を使われているのである[二八]。

上述した長い肩書の最初の官位「従五位下」と「大舎人助」を省けば、『国史略』の著者名は「音博士源朝臣松苗」となる。これを『光緒平湖志』の「日本音博士源朝苗」と対照してみれば、両者の関係が一目瞭然であり、明らかに『光緒平湖志』には「源朝臣松苗」の「臣」と「松」という二文字が脱落した。これは、おそらく『光緒平湖志』の編集者がこのような複数の官位からなる長い肩書の意味を理解しておらず、うっかりして抜けてしまった結果ではなかろうかと考えられる。

第二に、巖垣松苗『国史略』と沈浪仙『蜻蜓洲外史』との叙述範囲が全く同じである。

周知のように、『国史略』は、神代すなわち日本紀元の神武元年（西暦紀元前六六〇年）から一〇七代の後陽成天皇の天正十六年（西暦一五八八年）後陽成天皇の聚楽第行幸に至るまでの歴史を編年体で述べたものである。一方、前文で触れたように、沈浪仙『蜻蜓洲外史』の叙述範囲は周恵王の十七年から明神宗の十六年までであるが、周恵王の十七年が西暦紀元前六六〇年に相当し、明神宗の十六年がちょうど西暦一五八八年に当たるのである。要するに両書の叙述範囲は完全に一致している。

第三に、巖垣松苗の『国史略』の出版時期と沈浪仙の日本研究の時期が重複するのみならず、漢文による編年体の『国史略』は初刻本をはじめ、多くの刊本も実際に中国に輸入されたため、沈浪仙が『国史略』を目にして参照でき

る環境も揃っていたのである。

沈浪仙の日本研究はいつから始まったのかについては、はっきりと分からないが、彼の日本に関する著述の多さという点から見れば、きっと若い時より既に日本に対する強い関心を持ち始めたのではなかったかと思われる。巌垣松苗の『国史略』が刊行された文政九年（一八二六）は清の道光六年に当たり、沈浪仙の二十六歳頃のことであったが、現在の中国における『国史略』の所蔵状況から見れば、初版を含めて巌垣松苗の『国史略』は間違いなく中国に輸入されたことが分かる[二九]。その伝来時期については明確な記録が残っていないが、十九世紀の三十年代から四十年代頃の可能性が一番高いと思われる。この時期はまさに沈浪仙の日本研究の最盛期に当たる。

上述した三つの理由によって、沈浪仙が巌垣松苗の『国史略』を参照して『蜻蜓洲外史』を編纂したことは十分に考えられる。「刪潤之」という表現で表されるように、沈浪仙『蜻蜓洲外史』は巌垣松苗『国史略』の改作または翻案であると言える[三〇]。従って、巌垣松苗の『国史略』を通じて、紛失された『蜻蜓洲外史』の内容をある程度で復元することができると思われる。この点については別の機会で検討する。

(二) 日本漢詩に対する収集整理と編纂

沈浪仙の日本研究の中で、彼は一番力を入れたのが日本漢詩の収集整理と編纂である。上述した③番の『海上文徵』から⑧番の『大東詩錄』にかけての著作はいずれも沈浪仙が編纂した日本漢詩集であると考えられる。

というのは、当時の漢詩人の作品には、沈浪仙の日本漢詩収集活動および彼の編纂された漢詩集の書名までについての明確な記事が残っているからである。

前文に触れた山田梅村の『吾愛吾廬詩』を例として見ておこう。

『吾愛吾廬詩』第二稿巻四に収録されている「沈浪仙輯詩圖賦應其囑」には次のように、

君是博雅士、奇書富縹緗。文墨交四海、風騷疊千章。一編乍浦集、新著傳東方。洛紙頓添價、萬里姓名芳。
品評權量適、筆削心手忙。剖蚌珠落掌、鑿石玉盈囊。採擇妝葑菲、搜索及扶桑。

とある[三一]。山田梅村はこの詩の中で、沈浪仙の名声が「一編乍浦集、新著傳東方。洛紙頓添價、萬里姓名芳」のように日本にも響き渡っていると誉めるほか、沈氏の日本漢詩に対する論評について「品評權量適、筆削心手忙」と感激

し、また「搜索及扶桑」すなわち日本漢詩の収集については「剖蚌珠落掌、鑿石玉盈囊」つまり貝類から真珠または石から玉を取るような作業であると評価している。しかも同詩の割注には沈浪仙が編纂した日本漢詩集の題名について、

『乍浦集詠』載我邦人詩、又有『滄海珠編』、『大東詩錄』、『海上叢談』之著。

とある[三三]。ここでは、一八四六年末に日本に輸入された以降、日本でもよく知られている沈氏の『乍浦集詠』以外に、日本漢詩を収録する沈氏の著述として、山田梅村は明確に『滄海珠編』、『大東詩錄』、『海上叢談』という書名を取り上げている。また、山田梅村の『吾愛吾廬詩』第二稿巻三「酬沈浪仙見寄」という詩の中には、沈浪仙の原唱も掲載されている[三三]。

錦軸遙傳自大東、七千里外姓名通。照情兩地懸天鏡、飛夢雙橋駕彩虹。仙蟲化來書脫障、渴龍躍處筆摩空。
怜君鍾得扶桑秀、秋實春華冠國風。自注云、時輯『大東詩錄』、君詩為冠。

沈氏の「自注」に「時輯『大東詩錄』、君詩為冠」と言っているように、山田梅村の詩を編纂中の『大東詩錄』の巻首に掲載すると明言されている。それだけではなくて『吾愛吾廬詩』の沈浪仙の評には、山田梅村の詩が上記の漢詩集に収録されていた記事も散見している。例えば、山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻一「夏雨山中」という五言詩の後に沈浪仙の評がある[三四]。

沈浪仙云、居山不見山、五字獨有千古。錄入『海上叢談』。

また、同上書第一稿巻一に収録されている「蘆洲夜泊」の七言詩の後に、

沈浪仙云、有情有景、詩錄入『海上叢談』。

とあり[三五]、さらに同上書第一稿巻二に収録されている七言詩「靈源寺和尚見惠盆種白蓮　詩以謝之」の後に、

沈浪仙云、語語白蓮、詠物聖手。錄入『海上叢談』。

とある[三六]。加えて同上書第一稿巻二に収録されている五言詩「江村雜詠二首」及び「夏日遊山寺」の後にそれぞれ、

沈浪仙云、真景如畫、錄入『海上叢談』中[三七]。
沈浪仙云、已錄入『海上叢談』[三八]。

とあるように、少なくとも以上の五首の梅村詩は沈氏の『海上叢談』に収録されていたことが分かる。そのほか、沈

氏の『滄海珠編』に収録されていた梅村の詩が下記の二首が見える。『吾愛吾廬詩』第一稿巻二に収録されている七言詩「躑躅花」の後に、

沈浪仙云、此首録入拙選『滄海珠編』中。

とあり[三九]、また同上書第一稿巻二に収録されている五言長詩「夢遊唐館」の最後には、

沈浪仙云、層巒盤嶂、蹊徑幽深。此詩録入拙選『滄海珠編』中。

とある[四〇]。

亀田一邦氏の研究によれば、同時代における長崎の大友遠霞（一七九九～一八四三）、福地苟庵（一七九五～一八六二）、山本淡斎（一八〇一～一八六七）も沈浪仙の日本漢詩収集に協力した漢詩人である。そのうち、前述した山田梅村と同じように、大友遠霞も日本最も早く沈浪仙と付き合った漢詩人の一人として、『乍浦集詠』十六巻「外域」に八首を掲載されているほか、福地苟庵と山本淡斎の漢詩はそれぞれ『大東詩録』、『海上叢談』、『滄海珠編』に収録されていた[四一]。それだけでなく、安政元年（一八五四）に、沈浪仙からは山本淡斎に『大東詩録』序文の執筆を依頼したことがあるようである[四二]。

上述したことからみれば、『海上叢談』、『滄海珠編』、『大東詩録』などの著作が何れも沈浪仙が編纂した日本漢詩集であったことには全く疑問の余地がないと思われる。

なお、前に触れた沈氏『守経堂自著書目』には、それぞれの巻数として『海上叢談』八巻、『滄海珠編』二十四巻、『滄海珠編』続編八巻のほか、『大東詩録』という書名はないが、『東国詩録』四巻が見えるため、恐らく『大東詩録』と『東国詩録』は同書異名であろうと思われる[四三]。さらに『守経堂自著書目』には『海上文徴』八巻という記事があるので、数種の合計で沈氏の編纂による日本漢詩集の総巻数は五十二巻に上ったことが分かる。

なぜ沈浪仙はこんなに多くの日本漢詩集を編纂したことができたのか。それは、先ず沈氏が日本に対する強い関心を持っていたからであり、前述した『日本紀略』や『蜻蛉州外史』（『蜻蛉洲外史』）のような日本の風土・地理・歴史に関する著作はもう十分にこの点を物語っている。そのほか、日本文化の中でも、沈浪仙がとくに日本漢詩に目を向けたのは、言うまでもなく彼自身も詩人であるためである。今日まで残っている僅かの沈氏の著作にも彼の日本とりわけ日本漢詩に対する関心が窺える。例えば沈浪仙の『守経堂詩集』十巻本には、日本に関するものとして少なく

とも次の作品がある。

①「海上四愁詩」（『守経堂詩集』巻一）
②「海中神仙歌」（『守経堂詩集』巻二）
③「倭刀歌為林稼軒表弟熙作」（『守経堂詩集』巻三）
④「論日本詩」（『守経堂詩集』巻六）
⑤「劉心葭丈硯北吟巣詩題辞」（『守経堂詩集』巻十）

右の作品のなかで、とくに④の「論日本詩」（『守経堂詩集』巻六）は集中的に沈浪仙の日本漢詩に対する強い関心と深い素養を表している。「論日本詩」は沈氏の詩十四首および注釈からなる。注釈とは実に詩についての解説文であり、沈氏が江戸時代の著名な服部元喬（服部南郭、一六八三～一七五九）の『大東世語』を参照し、それぞれ嵯峨隠君子源清、小野篁、都良香、宗岡秋津、菅原文時、大江匡房、小野道風、藤原道長、藤原通憲、藤原為時、および村上天皇、一条天皇、白河天皇などの奈良、平安時代の漢詩人の作品や生涯などについて紹介している[四四]。紙幅の関係で詳論は別の機会に譲りたいが、ここでは、その中から二例のみを取り上げて、日本漢詩に関する沈氏の素養を覗いてみよう。

例えば「論日本詩」の第二首に、

海外才人説野篁、香山馳慕見詞章。
尹邢比美天心妒、未趁長風一聘唐。
白傅望樓詩為野篁作也。野篁幼隨父峰守客游、歸京、性好弓馬、不事學業。後漸悔、志學。十三試文章及第、官至參議。宏仁君時遣使聘唐、詔野篁為副、而與大使有違言、遂罷不發、中外以為憾。

とある[四五]。詩文の中の「野篁」は即ち小野篁の唐風の名前であり、詩の中の「香山」および注釈文の「白傅」が何れも唐の大詩人白居易（白楽天、七七二～八四六）のことを指す[四六]。周知の通り、小野篁（八〇二～八五三）は平安時代初期における名高い学者として、承和元年（八三四）遣唐副使に任ぜられるが、承和五年（八三八）に大使藤原常嗣とのいさかいから病気と称して職務を拒否した人物として知られるほか、小野篁の漢詩の才能が唐まで伝わっており、白楽天も小野篁が遣唐使に任ぜられたと聞き、彼に会うのを楽しみしていたという伝説は、平安後期の有名な文

人・学者である大江匡房（一〇四一～一一一一）の談話を筆録した説話集『江談抄』や、前述した服部南郭『大東世語』にも見られる[四七]。上の詩文から見れば、沈浪仙の注釈文においては、小野篁の父親の名前「岑守」を「峰守」に誤記され、嵯峨天皇の年号「弘仁」を「宏仁」に書き間違えられたという小さいミスが見えるが、基本的な内容は全く一致している。この事例を通じて、沈浪仙が小野篁の生涯や事績などについて熟知していたことは分かる[四八]。

また、「論日本詩」の第六首には、

鶯囀宮牆散曉陰、榮光湛露許賡吟。
園花御柳徒誇艷、不若燈殘竹裏音。

天歷君常召文臣菅文時等論文、君以詩自負勝於文時、曾題宮鶯囀曉光君臣同賦、君作先成、云、露濃緩語園花底、月落高歌御柳陰、以為壓卷。及文時作云、西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏音。君悵然謂不可及。

とある[四九]。注釈文の冒頭に見える「天歷君」とは村上天皇（九四六年～九六七年在位）であり、「天歷」は村上天皇の最初の年号であったわけである。また「菅文時」は即ち平安時代中期の文人・政治家である菅原文時（八九九～九八一）であり、著名な菅原道真の孫でありながら、詩才は抜群で優れて官位は従三品、式部大輔であったため「菅三品」とも称される。村上天皇と臣下の菅原文時との間には、詩の勝負を巡る説話、すなわち村上天皇からの「露濃緩語園花底、月落高歌御柳陰」という詩句に対し、菅原文時は「西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏音」で対応し、村上天皇が菅原文時の詩句を読んでたいへん感服したという逸話は、前述した『江談抄』および『大東世語』などの書物に掲載されている[五〇]。ほか、菅原文時のこの詩句は、十一世紀初頭に成立した、朗詠のための歌謡集『和漢朗詠集』にも掲載されている[五一]。

以上の二つの事例を通じて、さらに前稿で検討してきた沈浪仙の撰による「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」と合わせてみれば、沈浪仙の日本漢詩に対する素養の深さを覗くことができたと思う。それと同時に、沈氏の日本に関する豊富の知識は、『和漢朗詠集』、『江談抄』、『大東世語』、および前述した巌垣松苗の『国史略』のような各分野の日本書を広く読みあさって身に着けたのではないかと考えられる。

五、おわりに

以上、三章にわたって「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」詩文の著者沈浪仙を巡って考察し、長い間に知られざる、或いは忘れられてしまった沈氏の生涯、著述、とりわけ彼の日本趣味、日本研究の実像をクロッズアップしてみた。上述したところから見れば、沈氏の日本研究とくに日本漢詩研究の時期は主に十九世紀の前半期であり、最も早い時期に日本に目を向けた中国人の一人として、清末中国における日本漢詩研究の先駆者であったとも言える[五二]。

また、上述したことを通じて、本稿を執筆する前から持ってきた問題意識、即ちなぜ沈浪仙が「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」の詩文を書いたのか、あるいはなぜ彼ができたのか、という疑問に対する回答はもう出てきたのではないかと思われる。前稿で述べたように、五十六句からなる屏風の詩文は内容によって四つの部分に分けられるが、その中心的な内容は実に二つの方面に集中している。その一つは、室町時代から江戸時代の各時期（江戸初期、正徳年間、享保年間、天明年間等）にかけて、さらに屏風詩文の執筆当時（一八五五年頃）を含めて日本における漢学の発展・変遷・変化について沈浪仙なりの論評であり、もう一つは、屏風詩文の四名の受取人（落合雙石、広瀬淡窓、劉石秋、河野鉄兜）について沈浪仙なりの評価、および沈浪仙が彼らとの交流関係を語るものである[五三]。言い換えれば、日本漢学の全体像への鳥瞰という広い「面」から、個別の漢詩人に対する評論という深い「点」までに渡って行われている。このような壮大なスケールの詩文を書くには、ある程度で日本事情とりわけ日本漢学に対する深い理解がなければ、不可能であろうと思われる。上述した沈浪仙の生涯、特に彼の日本漢学に対する素養の広さと深さから見ると、沈浪仙がまさにそのような人物であると思われる。

注

一　石暁軍著「河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊に関する新史料―「姫路市林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」考」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二六号、二〇一三年三月）。

二　大庭脩教授の研究によれば、沈浪仙（沈筠）編集『乍浦集詠』は道光二十六年（弘化三年、一八四六）四月に中国浙江省乍浦で刊行後、同年十二月に異例な速さで『乍浦集詠』二十四部が日本に輸入され、御文庫、昌平坂学問

所、老中阿部伊勢守、牧野備前守、若年寄本多越中守、本庄安芸守、酒井右京亮が買い上げている。しかも間もなく嘉永元年（一八四八）十月には尾張で病中の伊藤圭介の抄録した『乍川記事詩』上下二冊が、翌年十一月には江戸で小野湖山の抄本『乍浦集詠鈔』四巻二冊が刊行された（大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所研究叢刊一、関西大学出版部、一九六七年）第一九七～一九九頁、同著『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎出版、一九八四年）第三九一～三九四頁、同著『漂着船物語―江戸時代の日中交流』（岩波書店、二〇〇一年）第二一八～二二六頁を参照）。その他、筆者の調査によると、嘉永元年（一八四八）には幕府御家人向山誠斎の抄録した抄本（向山誠斎「戊申雑綴」二十五『乍浦集詠』、大口勇次郎監修・針谷武志編集『向山誠斎雑記　嘉永・安政篇』第三巻　第三〇七～三三一頁、ゆまに書房、二〇〇一年）もあった。

三　光緒十二年（一八八六）刊行された『浙江省平湖県志』巻十七「人物列伝」三の「文苑」、巻二十三「経籍」の「史部・伝記類」と「集部・別集類」。また山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿（一八六六年、江戸文苑閣播磨屋）、王克三題辞を参照。

四　前掲大庭脩論著を参照。なお、沈浪仙の故郷であり、『乍浦集詠』の出版地でもある乍浦および浙江省図書館にも『乍浦集詠』は残っていないため、大庭脩教授が一九九一年に乍浦を訪れた時に『乍浦集詠』のコピーを乍浦に寄贈した。大庭脩「『乍浦集詠』乍浦に還る」（『東方』第一三〇号、東方書店、一九九二年一月。後に大庭脩『昭和元年生まれた達』に収録、同朋舎、一九九七年、第二〇三～二〇七頁）を参照。

五　徳田武著「山田梅村と沈筠・賀鏡湖・王克三」、同氏『近世日中文人交流史の研究』（研文出版、二〇〇四年）所収。第三七四～四〇三頁を参照。

六　亀田一邦著「沈浪仙の和詩収集と長崎文人―福地苟庵『蕉稿』とその周辺」、同氏『幕末防長儒医の研究』（知泉書館、二〇〇六年）所収。第三〇一～三三三頁を参照。

七　平湖の地方志については、『光緒平湖県志』のほか、また民国十四年（一九二五）の『平湖県続志』と一九九三年に上海人民出版社によって出版された『平湖県志』がある。なお、『光緒平湖県志』については、入手しやすい影印本は次の二つある。（A）一九七五年、台北の成文出版社に出版された『中国方志叢書』の『華中地方』第一八九号に収録されている影印本。（B）一九九三年、江蘇古籍出版社・上海書店・巴蜀書社の共同出版による『中国地方志集成』の『浙江府県志輯』二〇に収録されている影印本がある。

八　『光緒平湖県志』巻十七「人物・列伝」三「文苑」、第五十九葉。
九　『光緒平湖県志』巻二十三「経籍」「集部・別集」、第七十二葉。
一〇　『守経堂詩集』十巻本、第一葉、龍光甸序（光緒九年再刊）。光緒九年刊本の影印が『清代詩文集彙編』第二八七九種として、『清代詩文集彙編』第六一一冊に収録されている（上海古籍出版社、二〇一〇年十二月）。ここで『守経堂詩集』十巻本のコピーを提供してくれた浙江工商大学王宝平教授に感謝する。
一一　前掲『守経堂詩集』十巻本、第二葉、楊峴序。
一二　前掲『守経堂詩集』巻六、「戊戌歳除雑詩」、第二十葉。
一三　前掲『守経堂詩集』巻末に収録されている沈煒の跋文。
一四　前掲徳田武著「山田梅村と沈筠・賀鏡湖・王克三」、同氏『近世日中文人交流史の研究』（研文出版、二〇〇四年）所収。第三七四～四〇三頁を参照。
一五　小田園主人（山田梅村）『吾愛吾廬詩』第一稿（巻一、巻二）、沈浪仙の評および同書第一葉から第四葉の沈浪仙の詩と題詞を参照。慶応丙寅（一八六六年）、小田園刻本、江戸文苑閣発兌。
一六　前掲『吾愛吾廬詩』第二稿、第五葉、王峻明（王克三）の題詞を参照。
一七　前掲亀田一邦著「沈浪仙の和詩収集と長崎文人―福地苟庵『蕉稿』とその周辺」、同氏『幕末防長儒医の研究』（知泉書館、二〇〇六年）所収。第三〇六頁を参照。
一八　前掲『守経堂詩集』十巻本の巻末に収録されている「守経堂自著書目」。
一九　前掲『守経堂詩集』十巻本の巻末に収録されている「守経堂自著書目」。
二〇　『光緒平湖県志』巻二十三「経籍」「集部・別集」、第六十九葉。
二一　前掲亀田一邦著「沈浪仙の和詩収集と長崎文人―福地苟庵『蕉稿』とその周辺」、同氏『幕末防長儒医の研究』（知泉書館、二〇〇六年）所収。第三〇六～三〇七頁を参照。
三　管見の限りでは、現存する沈浪仙の著作は二種のみである。すなわち『乍浦集詠』十六巻と『守経堂詩集』十巻本である。前者は刊本の形で中国と日本の僅か一部の図書館には所蔵があるため、注釈四で触れたように、大庭脩氏が一九九一年に浙江省を訪れた時に『乍浦集詠』のコピーを乍浦に寄贈した。後者は中国の図書館のみに所蔵されているようである。その影印本は『清代詩文集彙編』第二八七九種として、『清代詩文集彙編』第六一一冊に収

録されている（上海古籍出版社、二〇一〇年十二月）。

二三　『光緒平湖志』巻二十三「経籍」「史部・地志類」、第三十三葉。

二四　前掲亀田一邦著書の第三二六頁を参照。第三点の「ほぼ一致」とは、頼山陽『日本政記』の叙述範囲は神武元年から慶長三年までであり、『光緒平湖志』の記事には、『蜻蛉洲外史』の叙述範囲は周恵王十七年から明神宗十六年までになっている。日紀の神武元年は西暦の紀元前六六〇年で中国紀元の周恵王十七年に当たるが、慶長三年は西暦一五九八年で明神宗二十六年に当たり、『光緒平湖志』にいう明神宗十六年と一致していない。そこで、亀田氏は『光緒平湖志』の「十六年」は「二十六年」の間違いではなかったかと推測している。

二五　厳垣松苗『国史略』書扉および各巻の巻頭（文政九年、皇都五車楼刻本）参照。

二六　周知の通りに「大舎人助」は律令制下の中務省「大舎人寮」の次官として正六位下であり、「音博士」は律令制下の式部省「大学寮」に属し儒学の経典の音読を教える官職名であり従七位上であった。ここでは厳垣松苗が官位不相当で即ち「従五位下」という高い位階で正六位下の官職「大舎人助」および従七位上の「音博士」を担当するため「行」や「兼」で表現している。最後の「源朝臣」に至っては、「八色の姓」の二番目としての「朝臣」が「源氏」の「源」に結びつけると武士の大姓となり、徳川家康も「源朝臣家康」と自称していたように、中世以降には家柄の高さの表現として形式的なものになっていたことが多いようである。

二七　『日本歴史大辞典』第二巻第九十六頁「厳垣松苗」（河村書房新社、一九六一年版）。

二八　例えば、文政九年（一八二六）に刊行された『国史略』には「従五位下行大舎人助音博士源朝臣松苗」になっている。また天保九年（一八三八）に刊行された『標註増補十八史略』には厳垣松苗の撰による序文の文末にも「従五位上行大舎人助摂音博士源朝臣松苗撰於平安東洞遵古堂」とある。両者の違いは最初の位階（「従五位下」から「従五位上」への昇進）だけである。

二九　王宝平氏の主編による『中国館蔵日人漢文書目』（杭州大学出版社、一九九七年）第一五八～一五九頁によれば、中国における厳垣松苗『国史略』の主な所蔵状況は次の通りである。文政九年（一八二六）皇都五車楼の初刻本は華東師範大学図書館に、安政四年（一八五七）刻本は山東大学図書館に、慶應元年（一八六五）刻本は大連図書館にそれぞれ所蔵されている以外、清華大学図書館、遼寧大学図書館、杭州大学図書館には明治以降の刻本も所蔵されている。

三〇　『国史略』は五巻であるが、『蜻蛉洲外史』は十二巻（一説は十六巻）である。これは、「刪潤之」即ち改作または翻案した結果であろうと考えられる。

三一　山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿巻四第四葉「沈浪仙輯詩圖賦應其囑」。

三二　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿巻四第四葉「沈浪仙輯詩圖賦應其囑」。

三三　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第二稿巻三第十二葉「酬沈浪仙見寄」。

三四　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻一第四葉「夏雨山中」。

三五　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻一第十六葉「蘆洲夜泊」。

三六　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二第二葉「靈源寺和尚見惠盆種白蓮　詩以謝之」。

三七　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二第六葉「江村雜詠二首」。

三八　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二第七葉「夏日遊山寺」。

三九　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二第六葉「躑躅花」。

四〇　上掲山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二第八葉一第九葉「夢遊唐館」。

四一　前掲亀田一邦論文参照。福地苟庵の場合は、『滄海珠編』に一首、『大東詩錄』に八首、山本淡斎の場合は『海上叢談』と『滄海珠編』に合計七首を収録された。

四二　上掲亀田論文参照。亀田氏によると、『大東詩錄』序文の依頼に関する沈浪仙の依頼状が伝存していないが、信頼に足る山本晩翠編『山本二翁合伝』（明治十二年、長崎歴史文化博物館蔵写本）の中にこのことを記載されている。

四三　『大東詩錄』という書名は日本漢詩人の記事にしか見えないことと、『守経堂自著書目』は沈浪仙が死去の前年に編纂した自著リストということを考えてみると、恐らく『大東詩錄』は最初の書名であり、最終的には『東国詩錄』に決定されたと考えられる。

四四　前掲『守経堂詩集』巻六第一葉～第四葉に収録されている「論日本詩」を参照。その題目は「論日本詩　注引南郭服元喬所著大東世語」とある。

四五　上掲『守経堂詩集』巻六、第一葉。

四六　白居易の字は楽天、号は香山居士であるが、晩年に皇太子の師である「太子少傅」を担当していたため、後世で

は、「白傅」とも呼ばれている。

四七　大江匡房の談話を藤原実兼が筆録した『江談抄』第四、第十八条に「古老相傳、昔我朝傳聞唐有白樂天巧文。樂天又聞日本小野篁能詩。待依常嗣來唐之日、所謂望海樓為篁所作也。（下略）」とある。また、服部南郭撰『大東世語』巻二「文学」に「又有人傳云、在彼白傅、亦欽日本有野篁、其望樓詩、蓋為野作。」とある。『江談抄』については、岩波書店一九九七年版、新日本古典文学大系32、山根對助・後藤昭雄校注『江談抄　中外抄　富家語』五一〇頁を参照。『大東世語』については活字本がないので、江都書肆嵩山房、寛延三年（一七五〇）刊本、第二冊第二葉を参照されたい。以下同。

四八　これに関連して、前に言及した山田梅村『吾愛吾廬詩』第一稿巻二に収録されている五言長詩「夢遊唐館」の最後に、「又云、昔野篁不得聘唐為憾事、今君臥遊唐館、白傅如在、當續望樓之詠矣」という沈浪仙の評も小野篁のことを言っている。

四九　上掲『守経堂詩集』巻六第二葉。

五〇　上掲『江談抄』第五、第五十七条（岩波書店一九九七年版、第五三三～五三四頁）、『大東世語』巻二「文学」第三葉～第四葉を参照。

五一　藤原公任撰『和漢朗詠集』巻上、第七十一条を参照。入手し易いテキストとして、日本古典文学大系73、川口久雄・志田延義校注『和漢朗詠集　梁塵秘抄』（岩波書店、一九六五年）第六十五頁、または新編・日本古典文学全集19、菅野禮行校注『和漢朗詠集』（小学館、一九九九年）第五十四頁を参照。

五二　徳田武氏と亀田一邦氏に指摘されているように、沈浪仙の日本研究は、清人による本格的な日本漢詩集の始まりとされていた著名な兪曲園（兪樾）『東瀛詩選』四十四巻（一八八三年刊）よりも四半世紀以上も前のことであるのみならず、しかも沈氏の編纂の動機も内発的なものであった（前掲徳田武氏と亀田一邦氏論文参照）。また、本稿の第四章第二節で明らかにしたように、沈浪仙が編纂した日本漢詩集の総巻数は五十二巻にものぼる。巻数も兪曲園（兪樾）の『東瀛詩選』四十四巻を超える。

五三　前掲拙稿「河野鉄兜と沈浪仙（沈筠）の交遊に関する新史料―「姫路市林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」考」（『姫路獨協大学外国語学部紀要』第二六号、二〇一三年三月）。

「林田敬業館河野鉄兜筆行草六曲屏風」詩文の著者沈浪仙（沈筠）について

On Shen Langxian (Shen Yun) The Author of the Poem in "*Kono Tetto's Gyoso Rokkyoku Byobu in Hayashida Keigyokan*"

SHI Xiaojun

《林田敬業館河野鐵兜筆行草六曲屏風》詩文作者沈浪仙（沈筠）研究

石 曉軍

2013年 3 月筆者在《姬路獨協大學外國語學部紀要》第26號發表了有關新發現史料《林田敬業館河野鐵兜筆行草六曲屏風》的考釋，同時指出該屏風詩文的作者乃是清末中國浙江省平湖縣乍浦的文人沈浪仙（沈筠1802-1862）。

本稿作為前述研究的延伸發展，從沈浪仙何以會寫作這首長詩作為出發點，通過沈氏《守經堂詩集》，《乍浦集詠》等碩果僅存的著作，以及散見於幕末日本漢詩人文集中的有關史料，探討了沈浪仙的生平，著述，尤其是沈氏有關日本研究的狀況，嘗試復原了長期以來被遺忘的沈浪仙的生平事蹟。

經過爬梳考證，發現沈浪仙畢生各類著述高達五十七種之多。其中除了沈氏自身的大量詩文集以外，他所撰述的有關日本歷史地理，尤其是其編纂的各種日本漢詩集，在其著述中佔有相當大的比重。無論從時間之早，還是涉獵範圍之廣來看，在同時代都似乎無人能夠與之比肩，堪稱清末中國研究日本的先驅者。這也正是沈浪仙能寫出《林田敬業館河野鐵兜筆行草六曲屏風》詩文的最重要的原因。